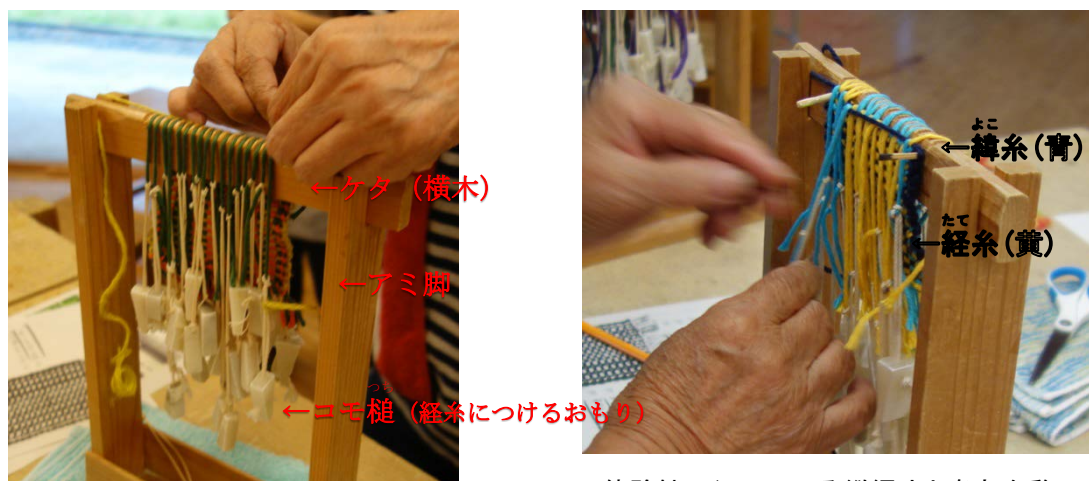


布を編む

「組織痕土器」と呼ばれる、土器底に編布等の圧痕をもつ縄文土器がある。土器に残された編目から、縄文時代の布の研究・復原を尾関清子氏が試み、著書『縄文の布』等でその研究結果を報告している。その徹底した資料観察により、編布が復原されていく過程に感動し、自分でも縄文の布を編んでみたくなった。

編布づくりは、当館の古代生活体験館の体験メニューにもあり、その内容は現代にも伝わる越後アングンの技法をベースにした縦編法でコースターを作る、というものだ。

縦編法とは、糸をかけるケタ(横木)と、それを支えるアミ脚を合わせた本体、それに経糸(たていと)を巻くコモ槌といった道具を用いて、経糸を前後に動かし、固定した緯糸(よこいと)に絡め編んでいく技法である。



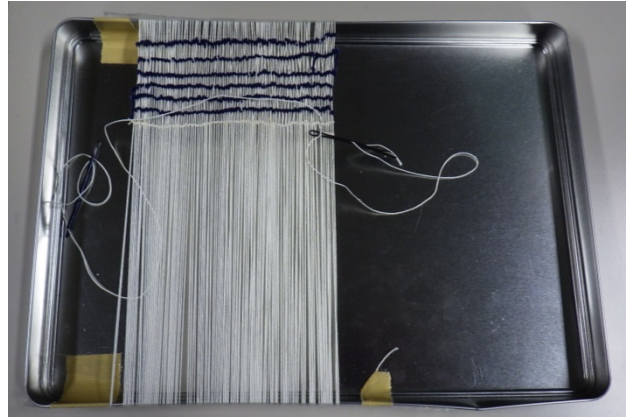
体験館で行っている縦編法と各部名称

しかし尾関氏の分析によると、宮崎県内から出土した土器の編布痕は、縦編法ではなく、横編法で作られた編布であることが明らかになっている。

横編法とは、木枠などに経糸を掛け、緯糸を絡め編んでいく技法である。縦編法との違いは、固定された経糸に、緯糸を動かして編んでいく点である。

私自身、縦編法は経験があるが、横編法は未体験である。尾関氏の著書には、横編法は縦編法に比べると難しい、と記されているが、どのくらい難しいのか想像もつかない。もし私がチャレンジして、なんとか編める程度だったら、古代生活体験館の通常体験メニュー(縦編法)に加え、「縄文時代の布を編む(横編法)」、といった新しい体験メニューが出来るのでは…との思惑もあり、横編法で編布を作成することにした。

目指したのは山田遺跡(延岡市)出土の組織痕土器に残された編布。布幅1cm内に経糸7~10本あり、緯糸は布長7~10mmにつき1本編まれている。自分の手芸能力(!)を考慮し、経糸と緯糸の区別が付くよう色を変え、布幅も実際の大きさより狭く11cmとした。糸



山田遺跡出土の編目痕の残る土器（底部）

木枠法で行った横編法（途中経過）

の太さは実物に近づけるべく、レース編み用の糸を用いた。

まずは経糸(白)を木枠に張ることから始めた。最初は、100均で購入した額縁の枠に経糸を張ってみたが、その張りの強さに耐えられず、あえなく破損。そのため菓子缶の蓋に経糸を巻き付けることにした。そして横に広がらないよう、両端をガムテープで固定した。経糸は全部で120本、結構な数である。次に緯糸(青)を針の代用であるヘアピンに挟み、経糸に絡め編み進めていった。

しかしここからが大変であった。糸が細いため編み飛ばし等のミスが多発…縄文土器にも多くの編みミスが残されているが、その比ではないくらいの編みミス。

結局、緯糸を1本編むのに30分から1時間近くかかった。これは苦行以外の何物でも無い…新メニューとすることは早々にあきらめたが、折角ここまでできたので、なんとか完成させ12/9(土)に開催する講座「野焼きで土器作り」にて組織痕土器を作成するのに使おうと目論んでいる。

(谷口晴子)

参考・引用文献：尾関清子 2012『縄文の布 日本列島布文化の起源と特質』株式会社 雄山閣

尾関清子 1996『縄文の衣 -日本最古の布を復原-』株式会社 学生社

宮崎県埋蔵文化財センター2007「山田遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
第146集 (土器写真：宮崎県埋蔵文化財センター提供)